



TITLE:

現代社会における医療・看護・介護に関するグループ・ダイナミックス的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

鮫島, 輝美

CITATION:

鮫島, 輝美. 現代社会における医療・看護・介護に関するグループ・ダイナミックス的研究. 京都大学, 2015, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19053>

RIGHT:

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	鮫島 輝美
論文題目	現代社会における医療・看護・介護に関するグループ・ダイナミックスの研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、現代日本社会における医療・看護・介護の支援活動に関して、実践的フィールドワークを通じて、先進的事例を詳細に記述するとともに理論的に考察し、新たな支援のあり方について論じたものである。具体的には、①医療については、住民主体の地域医療を牽引する2人の医師による活動、「ともに生きる・京都」および「でこそその医療」の事例、②看護については、乳幼児をもつ母親の自信と能動性を育む「福井母乳育児相談室」の事例、③介護については、ある医師がアルツハイマー型認知症を発症した妻を24年間在宅介護した体験をもとに立ち上げた「認知症居宅介護研究所」を事例として取り上げた。</p> <p>第1章で本研究の問題意識について述べた後、第2章では、本研究の研究アプローチの基礎である人間科学およびグループ・ダイナミックスについて概観し、続く3～5章の事例を考察するための理論的基盤として、グループ・ダイナミックスの規範理論を紹介している。</p> <p>第3章から第5章は、本研究の中核部分である事例研究となっている。第3章では、まず現代医療の2つの問題点として、①患者という人間ではなく、患者の「病気」だけが医療の対象とされる傾向があること、②病気の専門家である医師と患者の間に「強者—弱者」の関係があることを指摘し、さらにそれらの問題が、フーコーの言う「生-権力」が閾値を超えて過度に強化された帰結であることを論じている。次に、これらの問題点を克服する先駆的事例として、京都市において住民主体の地域医療を長年牽引している2人の医師の活動、「ともに生きる・京都」および「でこそその医療」の事例を、申請者自身がスタッフとして関与した長期的なフィールドワークに基づいて記述している。最後に、これらの事例をグループ・ダイナミックスの規範理論に基づいて考察し、これらの実践事例は、「(a)原初的な規範形成プロセス→(b)規範の抽象化→(c)規範の過度の抽象化→(d)原初的規範形成フェーズへの回帰」のうち、(d)の段階を具現化したものであり、したがって過度に強化された「生-権力」を原因とする2つの問題点を克服する方途を示すものであると結論している。</p> <p>第4章では、まず乳幼児をもつ母親を対象とした看護の3つの問題点として、①母親個人の能力不足・資質不足を問題とみなし、その補完を目指すスタンスがとられていること、②母親の当事者性が看過されがちであること、③専門職である看護者が、無力な母親を指導するという非対称な関係が自明視されていることを指摘している。次に、これらの問題点を克服する新しい看護の取り組みとして「福井母乳育児相談室」の事例を取り上げ、筆者自身が育児に悩む母親として参加した経験をふまえつつ、その特徴を、母乳育児の土台となる「食事療法」、健康管理としての「手当法」、乳房マッサージを受ける場と順番を待つ場が一体となった「待合室」の3点に整理し、詳しく記述している。最後に規範理論に基づいて考察し、①「看護者—〈乳房〉—母親」、「看護者—〈乳房〉—子ども」の2つの3項関係における溶け合いを通じて、母親固有の「母乳育児の意味」が創出されていること、②その意味は、「母親—〈乳房〉—子ども」の3項関係における頻繁な溶け合いを通じて強化・安定すること、③さらにその意味が同じ待合室にいる他者に伝達されることで「能動的に子育てする母親」という規範が生成・強化されることを論じている。</p> <p>第5章では、まず「介護＝負担」とみなす傾向にある現代社会において、従来の認知症</p>			

介護の3つの問題点として、①要介護者の認知機能・能力の低下を問題とし、その低下を補うことが目的とされていること、②家族の「介護力」が前提とされ、その不足が問題視されていること、③専門家である介護者が要介護者およびその家族を指導するという非対称な関係が自明視されていることを指摘している。次に、これらの問題点を克服する事例として、ある医師がアルツハイマー型認知症を発症した妻を24年間在宅介護した体験をもとに立ち上げた「認知症居宅介護研究所」を取り上げ、申請者がスタッフとして関与した長期的なフィールドワークに基づいて、その特徴を①「妻が楽しくなるような介護」という方向性、②介護力不足を問題とするのではなく、必要な支援を「課題」としてその課題解決を試みる姿勢、③（要支援者である）妻—医師—支援者の溶け合う関係を通じた長期的な日常的支援に整理している。最後に、規範理論に基づいて考察し、支援者が「専門家」の視座を戦略的に捨てて、要介護者との溶け合いを楽しむ姿勢が、「介護＝負担」という図式を脱却し、「生活障害を共に改善する人」として新たな介護関係を生み出しうることを論じている。

最後に第6章ではグループ・ダイナミックスの観点から前章までの知見を整理した上で、医療・看護・介護の領域における新しい支援関係のあり方を「身体溶け合いを妨げない支援」と位置づけ、今後の課題として、①新しい支援のあり方のレパートリーの拡充、②新しい支援のあり方を求める活動の原動力について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、現代日本社会の医療・看護・介護における支援関係の問題点を明らかにし、そうした問題点を克服しているとみなすことができる先駆的事例について長期的なフィールドワークを行い、新たな支援関係のあり方を検討したものである。

本研究の特徴は、第1に、規範理論に基づく理論的考察を通じて、現代日本社会の医療・看護・介護における支援関係の問題が、フーコーのいう「生-権力」が過度に強化された帰結であることを示した点である。具体的には、これらの領域における支援関係に共通する問題点を、「支援の対象となる問題を、被支援者の能力や身体的機能に還元して捉える問題」と「支援者―被支援者関係が非対称な上下関係であることを当然視する問題」とに整理し、それらが「生-権力」の過度の強化という社会の動きに由来していることを論じている。このことによって、医療・看護・介護の領域における問題点を、明確な関係主義的な観点から捉え直すとともに、社会的文脈の中に位置づけることに成功している。さらに、規範理論の観点から、「生-権力」の過度の強化に由来する問題点を克服する方途、すなわち、「原初的規範形成フェーズへの回帰」を示唆している点も重要である。

本研究の第2の、最も重要な特徴は、長期的なフィールドワークに基づく先駆的事例のエスノグラフィーを通じて、上述の問題点を克服する方途を説得的に示している点である。第3章では、一人の人間としての患者と相対していこうとする姿勢をもち、患者との対等な関係に基づいて支援活動を営む2人の医師の姿が描かれている。第4章では、濃密かつ徹底した母乳育児支援活動を通じて、母親が母親としての自信と能動性を獲得することを支援する活動が描かれている。第5章では、介護を単なる負担ととらえるのではなく、支援者や介護家族とともに学び合う「共有」的關係を前提とした認知症介護の活動が描かれている。これらはいずれも、①被支援者を一人の人間として遇する姿勢、支援の対象となる問題を被支援者の能力や身体的機能に矮小化して捉えるのではなく、関係主義的にとらえる姿勢、②支援者―被支援者の関係を、従来自明視されてきた上下関係としてではなく、対等な関係として捉える点で、医療・看護・介護における支援関係が抱える問題を克服するものとなっている。さらに、各事例の分厚い記述は、「原初的規範形成フェーズへの回帰」という抽象的な理論言語の鮮烈な具体例を提供している。

本研究の第3の特徴は、上の特徴とも関連して、先駆的事例の分厚い記述と理論言語とをうまく結びつけて論じている点である。規範理論を理論的考察の縦糸として、これらの事例が、「生-権力」の過度の強化に由来する問題群を克服し、「原初的規範形成フェーズへの回帰」の具体的実現例となっていることを示したことは上述の通りであるが、そのほかにも理論言語による貢献が大きい。第3章では、2人の医師の姿勢を、集团的・ネットワーク的リーダーシップという観点も加えて考察している。第5章では、認知症介護の活動に関わる当事者たちの関係を「共有」という観点から考察している。一般に、人間科学が研究対象とする現場は、常に、ローカリティを帯びており、本研究が対象としているような先駆的事例は特に特殊性の色合いが濃い。そのような事例の記述やそこから得られた知見を、理論言語を用いて抽象化することによって、事例研究はインターローカリティを獲得する。本研究は、事例の分厚い記述がもつ説得力に加えて、理論言語による抽象化によって、その知見が他の事例にも通用可能・伝播可能なものとなるインターローカリティを備えているものと評価できる。

本論文の骨格をなす3つの事例研究は、いずれも申請者の長期的フィールドワークに基づく力作であることは、あらためて強調しておきたい。申請者は、第3章と第5章の事例については活動のスタッフとして、第4章の事例については支援を受ける当事者として、それぞれの活動に深く参与しながらエスノグラフィーを描いている。このことが、各事例の分厚い記述を可能にし、本論文の説得力を大いに高めている。

以上のように、本論文の個々の事例研究は、いずれも長期間にわたる参与的なフィールドワークの成果である。本研究は、深い理論的考察に基づいて現代日本社会の医療・看護・介護における支援関係に関して問題提起を行った上で、フィールドワークの成果を十分に活かして、その問題を克服する新たな支援の方途を理論的・実践的に示した優れた研究であり、共生人間学専攻人間社会論講座の研究にふさわしい内容を備えたものと言える。また、医療・看護・介護の領域にとどまらず、規範の過度の抽象化に伴う社会の失調を克服する方途を考察する上でも、理論的、実践的示唆に富むものと評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年9月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降